



Title	日常に根ざすアートとアートセラピー：「エンパワメント」概念によって見えてくる構図
Author(s)	石原, みどり
Citation	a+a 美学研究. 2017, 10, p. 96-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90163
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日常に根ざすアートとアートセラピー

——「エンパワメント」概念によって見えてくる構図

096

097

この数年、筆者はアートセラピー（芸術療法）^{〔1〕}の共同研究に携わっている。アート（芸術）を手段として治療あるいは癒しのために用いる実践を芸術学の立場で論ずることは、アートを目的とする近代主義的芸術観に馴染んできた筆者にとっては抵抗感を覚えるものであった。それゆえ、アートセラピー研究にあたっては近代的芸術観を留保し、可能なかぎり中立的な視点で実態にアプローチしていった。しかし、アートセラピーの実態や現代のアートシーンを見ると、目的と手段の狭間を行き来するような活動や、目的と手段が一体となったような活動が多種多様に実践されており、この二分法が単純に過ぎることが明らかとなった。本稿ではそうした新しい活動がどのようなものかを提示し、現代社会においてアートとアートセラピーがどのように関係しているのかを俯瞰的な視点から考察したい。

日常圏で実践されるアートセラピー

日本におけるアートセラピーは精神（心理）療法の一つとして確立されてきた。近代的精神医療も明治期より欧米に学ぶかたちで進められてきたが、アートセラピーもその流れのなかで一九五〇年代から徐々に紹介され、日本に馴染むよう修正・考案されてきた。しかし今や臨床現場に留まらず、日常場面でアートセラピーが実践されている。その目的は、健康な人・未病の人・慢性期（生活期）^{〔2〕}にある人の健康維持・増進、病気の予防、QOL（生活の質）の向上や、社会的あるいは個人的生きづらさを抱えている人が生きやすくなったりすることを手助けすることである。

これらの活動は、「心のケア元年」となった一九九五年に起きた阪神淡路大震災が一つの契機となり、九〇年代後半から顕著に増え始めた。そして、今後、精神医療や知的障害者・高齢者福祉の施設設化^{〔3〕}地域生活への移行政策、子育て支援や若者支援の政策と呼応して、多分野でさらに需要が高まるだろう。そこで、日常圏のアートセラピーが正當に理解・評価され、今後展開していくための一助となるべく、我々はこれを「市井のアートセラピー」と名づけ研究に着手した。まず実態を把握するために、その担い手である自称「アートセラピスト」や「アートセラピスト」と見なされることに同意する活動家を主な対象として全国実態調査を行い、活動内容を把握・整理・分類し、社会的

10

a+a

表2 | 事例調査の内容（8/27件）

# 事例番号・性別・年齢・経年数		①立場・資格 ②アートセラピー活動の背景・内容
#6	男 (80才) 30年 ★	①発達支援の社団法人理事長、言葉の音楽療学会・研究所主宰。音楽療法士、元小中学校教諭。 ②学校の教育現場で音楽が発語を促すことを発見し、授業のなかで発音・発語教育を目的とした独自のメソッドを確立した。最後の8年は小学校の特別支援学級を担任し、退職後は自宅に発語音楽療法の研究所を設立する。年金で生計を立てながら、自宅や福祉施設にて各種障害児を対象に言葉の音楽療法を実践する。また数・時間・お金などの概念や使い方など社会生活に必要なスキルも指導。リハビリ的な（時に苦痛を伴う）言語訓練等では成果が出てくい子どもでもほぼ確実に進歩が見られる。いわゆる音楽療法ともリトミックとも異なる療育の一手段とみなせる。メソッドの習得・実践には高い演奏技術等が不要で、保育士・支援者・保護者なども担い手となり得る。学会組織を立ち上げ、自宅および全国でセミナーを行い後進育成・普及にも注力する。
#8	女 (54才) 5年 ★	①薬局代表、薬剤師。子どものアトリエ主宰。チャイルドアートカウンセラー、色彩心理カウンセラー。 ②アートセラピスト自身の皮膚炎との苦しい付き合いや西洋医学の限界の実感から、疾患の背景に精神的問題があると考え、心の問題に取り組む。アート好きもあり色彩心理学を学び、児童期のある体験が抑圧的に作用してきたことに気づき、それを認めて以来再発していない。色彩心理と漢方の陰陽五行がアートセラピストのなかで繋がりが、心身一如という漢方の考え方とも合致することから、薬局で希望者にアート療法を提供し、心と体の両面から患者をケアする。並行し子どもの造形教室、漢方とアートセラピーの研究会・講座を各々月1-2回開催。薬局の仕事は人に任せ、自分はアート療法の実施や普及に専念していきたい気持ちが強い。
#11	女 (59才) 20年 ★	①福祉レクリエーション・ワーク、社会体育指導員、初級介護人、ミュージカル劇団主宰。 ②大学在学中21歳で劇団を立ち上げ、ステージ活動で団員がどんどん肯定的に変化していく姿に、ミュージカルの力を感じる。スタジオを数カ所経営していたが阪神淡路大震災で閉鎖、福祉施設で介護やレクリエーション活動を開始。特養でパート勤務しつつ関連資格を取得、レクリエーションとセラピーを組み合わせた活動が増えていく。スポーツセンター、文化センターなどで体操やエアロビ、創作芝居（生徒自身のことを物語化する）の講師を務める。セラピーのアプローチ重視の旨を伝え、生徒は理解した上で受講。但しセラピー性を前面に出さず、ステージワークやレクリエーションとしての枠組にセラピー要素を組み込む。アートセラピーでの利益は全く考えていない。
#12	女 (56才) 21年 ★	①NPO法人・株式会社代表。画家、染織家。学校心理士、ガイダンスカウンセラー、アートセラピスト。 ②中学の美術教師であったが学校の教育制度が合わず、出産を機に退職、自宅で作家活動・絵画教室活動を開始。自由に描くこと、語らうことが行われ、アートセラピーが意図せずなされていた。その実績が積み重なり、周囲からの要請と協力のもとNPO法人を設立。幅広い年齢層を対象に、保健福祉や教育、企業など多岐の領域で活動。現在週でスクールカウンセラーとして心理相談、カウンセリングを担当。近年、これまで独自に構築してきたアートセラピーの手法を用いて多くの人に伝え、後身を育成することに力を注ぐ。法人運営を補うため株式会社も設立。依然として資金繰りは困難なため自己借金で補填しつつ、活動を継続させている。
#16	男 (65才) 20年 ★	①アート教室主宰。画家、Therapy Artist。元経営コンサルタント、元心理カウンセラー。 ②心の赴くままアクリル絵の具で描く独自のスタイルの画家で、アート教室も主宰。一方、プロセス指向心理学をベースとした心理カウンセラーとしても活動。やがて両活動の内容が融合する。その手法がプロセス指向心理学の創始者A・ミンデル博士から評価を受け、彼の助言のもと独自の心理学的なアートセラピーの体系を構築。自宅、文化センター、カルチャー・スクールで大人・子どもを対象に教室を開講。2時間で描画、作品から心的状態を読解。大人の場合、多くがカウンセリングへと展開する。その他、児童養護福祉施設で絵画教室を担当。最近は、音楽を体系に組み入れる試みも行う。アートセラピーの本質がぶれないようにすれば、アートセラピストとは違う経営感覚で収益化を図ることはでき、アートセラピーが専有化されていない領域だからこそ、独自の発想で自由なあり方を追求できるとする。
#17	女 (59才) 20年 ★	①有限会社代表。アートセラピスト。 ②1980年代末画廊に就職し、絵を見る・描くことの癒し効果に興味を持ち、「明るく有意義な人生を送るための指針としてのアートセラピー」を目指す。当時、そうしたアートセラピーを学ぶ機関や教材はなく、また理解や支援を得るのも難しい状況であったため、手探りで無料講座を行いながら独自のプログラム、分析方法、さらに養成課程を構築。社会で働く人・働ける人=心の自己コントロールができる状態の人を基本的人象とし、主に企業向けセミナーを実施。分析では、相手を見て否定的なことも軽快に指摘する。具体的な行動を提言することもある。近年はとくに女性の支援に力を注ぐ。2004年に会社設立。社員時代に築いた人脈や企業人のネットワーク組織などを通じ営業活動を行うが、生計はアートセラピー的視点に立ったデザイン・企画・設計や絵画制作などの副業で立てる。
#23	女 (44才) 5年 ★	①写真家、フォトセラピスト。元ブライダルカメラマン。 ②アートセラピストが個人的に撮影・現像するなかで閉塞感を脱する出来事があり、写真の治癒的效果を実体験する。勤務の傍らフォトセラピー、アートセラピー、心理学、カウンセリングを学ぶ。撮影に重きをおいたWSを月1-2回開催、また随時開講受付。心や感情の赴くまま被写体を選び自由に撮影したものには内面が表出しており、それらについて、セラピストや参加者たちとシェアリングする。また撮影自体に、自己の外へ意識を向かわせ外界から刺激を得させるセラピー的な効果がある。参加者は、フォト教室の生徒やカメラ好きの人、トイカメラに興味がある人が中心であるが、2014年後半にはセラピー目的で受講する人も出てきている。
#24	女 (44才) 6年	①陶芸家、陶芸講師、アーツセラピーコーディネーター。 ②東京の美大卒業後、陶芸家に弟子入りし教室の手伝いをするなか、障害者施設で共に指導する機会を得る。この経験から、帰郷後も作陶をしつつ、セラピー効果を意識した陶芸教室や陶芸セラピーを開講。これは陶窯が地域に迷惑や危険を及ぼし得る分、地域社会への貢献としてお返ししたいという思いも含む。陶芸は退行しやすいことを踏まえ、対象者の状態・目的に応じ年間でスケジュールを立て、内容を決める。芸術性を意識させぬよう注意し、作陶技術は必要な時のみ伝授。その時々で気持ちが解放されるよう自由な場の形成・維持に務める。老人保健施設、精神科病院デイケア（通所）でも実施。現在の資格では心理相談やカウンセリングは無理と考え、各施設の専門家と相談・連携してWSを開催。

*1 情報はアンケート調査で回答してもらった2012年度に関する内容に基づく。その後、報告書の作成にあたり情報掲載の許可を得る際、近況（2013年10月時点）についても聞き、その内容を反映させている。
*2 ★印はワークショップ（WS）、セッション、教室の参与観察を行った事例。

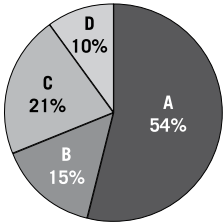


表1 | アートセラピーを行うようになったきっかけ

- A. アート系の勉強・仕事をするなかでアートセラピーに出会った
- B. 自分や家族、友人がアートセラピーやアートによって変化したり救われたりした
- C. 対人援助職の勉強や仕事をするなかでアートセラピーに出会った
- D. その他

に位置づけつつ、課題や問題の解決策を模索してきた^{「3」}。
全国実態調査^{「4」}から把握・分析される市井のアートセラピーの全体的な実態像については報告書にあるので、本稿ではこのアートセラピーの特長にしばって論を進めよう。次頁の表2に、インタビュー調査事例を八件選び活動内容をまとめているので、そちらを随時参照されたい。

これまでの調査から、市井のアートセラピストは人口に比例して全国各地に存在すること、方法・内容・形態・レベルの点で多様であり、混然としていることなどが把握されている。注目したいのは活動の発生の仕方である。表1を見ると、回答したアートセラピストの五四パーセントが「A」、すなわちアートと関わるなかでアートセラピー機能を発見しその重要性に気づいたことを活動の契機としている（たとえば表2-1#11、#12、#24）。そして、一五パーセントが「B」の自分や周りの人がアートセラピーやアートに助けられたからという（たとえば表2-1#8、#23、#24、#27）。このように、アートに関わる活動や表現行為の過程でアートセラピー的機能が発動し、その機能の重要性や必要性を認識した人が、各現場に応じてセラピー機能を取り込み、彼らが有する知識や技術、経験と融合させながら多様に深めていったのである。活動方針やルールは現場の状況や実践経験に即しており、その意味で活動は自律的である（たとえば表2-1#6、#8、#16）。

またキャリア三〇年以上のアートセラピストや高齢（八〇代）のアートセラピストの存在が目される。彼らは、九〇年代のセラピー文化の興隆とその後のアートセラピーの拡大以前から、独自に活動していたことを示す。彼らに限らず、名もない活動のほうが先行し、後付けでアートセラピーと命名されたケースがいくつか見られる。

この「内発性」と「自律性」が市井のアートセラピー活動を大きく特徴づけるものとして指摘できる。そうすると、日本のアートセラピーを牽引してきた病理学的アートセラピーを正統と見なし、それが希釈され社会の心理主義化の時流に乗って隣接分野へと派生していったという図式は見直される。むしろ、各人の活動の一部が社会の心理主義化のなかでアートセラピーとして再定義されたと見るべきである。

表3 | アートセラピーの5系統

心理療法系	専門的な診断と治療の必要な人＝具体的に行動面や社会生活に問題が生じている人、また精神疾患と診断される（診断され得る）人が対象。問題・症状の緩和や治療の中心的あるいは補助的な手段として実施。目指す内容として自己探知系と重なる部分が多い。
自己探知系	比較的健康度の高い成人が対象。気晴らし・ストレス解消・保養・癒し・自己解放・自己発見・自己肯定・QOL 向上などが主な目的。その他、問題に向き合う、精神疾患を予防するなど、心理療法系につながる場合もある。
リハビリ系	脳機能障害の人が対象。機能回復、症状の進行抑制・緩和・安定などが目的。高齢者対象の認知症の予防、認知症の進行抑制・緩和・安定も含む。ADL（日常生活動作）や言語機能の向上、障害の自己受容が目的であるリハビリテーションを補助あるいは牽引する。心理面にも関わるが、基本的に心理療法ではない。
発育支援系	子ども・若者が対象。遊び要素のある自由な表現を通じ、抑圧からの解放・自己表現の促進、自信を持たせ自己肯定感を高めることなどが主な目的である。種々の障害児に対しては、社会的自立、QOL の向上を目指す「療育」の一手段となる。表現方法の獲得や発語・発話能力の開発などをを目指す。心理療法につながる場合もあるが、基本的にそれとは異なる。発育支援系には保育者に対する子育て支援の要素も含まれる。
表現系	各種障害のために通常のコミュニケーションや社会生活が困難な人、あるいはその症状の表れとして内発的に表現活動を行う人が対象。非言語的な表現行為によって外部世界と接触・交流ができたり、充実した時間を過ごせたりすることで QOL 向上を目指す。その結果としての制作物がアート市場に出る可能性もある。心理面にも関わるが、基本的に心理療法ではない。

次にアートセラピーの分類を示しておきたい。最初に見たようにアートセラピーは多目的で多様である。これを混在させたままでは議論が噛み合わないことがあるため、一定程度整理しておく必要がある。先行研究において筆者が提示した四分類を今回の研究で検討し、「心理療法系」「自己探知系」「リハビリ系」「発育支援系」「表現系」の五分類に修正した「表3」。特に「自分探し・自己啓発系」を価値中立的な名称にするため「自己探知系」とした。また社会化の途上にある子どもを対象とするアートセラピーは教育要素が大きく、大人対象のアートセラピーと区別すべきことがわかったため、新たに「発育支援系」を加えた。

この作業によってアートセラピーが提供される分野も明確になった。それらは、実践されている社会環境や依拠する社会制度に応じ、医療・保健、福祉、教育、能力開発という四分野となる。

市井のアートセラピーを「エンパワメント」と定義する

市井のアートセラピーでは「表現行為や表現されたものを通して自己の内面や抑圧された感情に気づき受容していく」という心理療法のプロセスに類することも行う。しかし、その守備範囲は日常生活をうまく生きていくための

「支援」であり、病理学的アートセラピーが行う治療の補助ではない。だが彼らの活動を適切に表す名称がないため、病理学的アプローチが発展させてきた「アートセラピー」という呼称を用いている。その結果、「アートセラピー」として認められない」「正しい知識と技術に基づいておらず評価できない」「ヒーリング・アートのようなものだ」などの誤解や無理解が生じている。市井のアートセラピストが自己規定し社会的立場を確立するには、まず病理学的アートセラピーとの共通性と相違性、関係性を明らかにし、より適切な名称を獲得する必要がある。

我々が行き着いた、今のところ最も有効と思われる概念が「エンパワメント empowerment」である。ではエンパワメントとはなにか。

当初この言葉は、中世イギリスにおいて教会が領主に一定の権限を付与することを意味していた。その後、一九六〇―七〇年代にアメリカの公民権運動やフェミニズム運動、さらに世界各地の南北問題や障害者運動で使われるようになった¹⁾。そこでは白人と同等の、あるいは男性と同等の、あるいは健康者と同等の権利を獲得するという意味合いが強かったが、徐々に意味が転換し、現在では「その人に内在する資源に働きかけることによって、本人がその資源に気づいてそれを活性化し、主体的に思考・選択・主張できることを支援すること」を指す（以下傍点「、」は筆者強調）。九〇年代後半には医療・保健、福祉、教育など多分野で重要視され始め、日本では二〇〇〇年以降、エンパワメントに関する実践や研究が見られるようになった。

このような市井のアートセラピーの実践領域と重なる分野での動向を見過ぐす手はない。確かにすでに評価をまとった概念の適用は、市井のアートセラピーの特長である多様性、柔軟性を削ぐ危険もある。しかし、エンパワメント概念での定義づけがもたらすメリットの方が大きい。

まずメリットとして、アートセラピー全体をセラピー要素とエンパワメント要素の両尺度で立体的に捉えられるようになり、病理学の枠組から外れるアートセラピーが「セラピーといえるか否か」という議論に終止符を打つことができる。それと同時に市井のアートセラピストの立場が明確化し、エンパワメントの理念を行動の指標にすることが可能となる。

また、先に見た五分類もさらに整理が進み、医療機関におけるアートセラピーでも、リハビリ系はもとよりターミ

ナルケアとしてのアートセラピーなどはエンパワメント要素が強いものとして捉えられるようになる。そうすると、エンパワメント要素の度合いによってアートセラピーの評価は、これまでの心療的評価基準を縮小し、自己肯定感や当事者のQOL状態を把握するなどの社会的評価基準や福祉的評価基準を拡大することが重要になる。

もちろん、アートセラピー全体の基盤となる概念や技法の開発および普及においては、精神病理学の知見と心理療法としてのアートセラピーが牽引してきたことは紛れもない。アートのもつセラピー機能が有効に発動するためには安心して表現できること、表現を強要されないこと、たとえ痛みや傷、否定的な感情を表現しても暴走しない枠組やフォローなどが求められる。利用者の状態や状況によっては各専門家に接続できなくてはならない。その点で、実践者には、精神病理や心理学、心理療法についての基本的な知識が求められ、かつ自己の能力・立場を客観的に認識する能力、自分がどういった人々を対象とするのか、あるいはできるのかを見極める判断力が必要である。確かにセラピーームに乗じたアートセラピーもあり、急速に市井のアートセラピストが増加するなかで能力不足の者も現れ、安全性に欠ける事例や独善的な事例が発生していることも事実である^{〔8〕}。利用者保護の観点から、エンパワメント型アートセラピーに適する指標と評価基準を定めることが急務である^{〔9〕}。

もう一つのメリットは、エンパワメント概念が当事者・支援者の対等な社会関係を明示する点にある。エンパワメントの理念として、支援者は、当事者の潜在的もしくは顕在化した病氣や欠陥に注目し専門的権威者（治療者）として関わるのではない。両者はストレングスをもった人間同士として出会い、協働的で対等な関係を構築する^{〔10〕}。市井のアートセラピストもこの理念を共有していることがアンケートから読み取れる。対人援助活動を始めた動機についての自由記述には、「援助活動と思っていない」「自分が経験したいものを広めたい」「一緒に楽しみたい」「アートが好きだから」「自己成長になる」「美術教育に不安を感じた」などがある^{〔11〕}。エンパワメント型アートセラピストには一定の専門的な知識と技術、活動の倫理が求められるが、当事者に対して治療的立場で向き合うのではなく寄り添う立場を取る。しかし、一方がエンパワメントを必要とする社会的弱者で、他方が資金力や体力、知識のあるアートセラピストである場合、まったき意味で対等に会合することは不可能であることも意識する必要がある。さらに言えば、この理念の実現において、制度や組織のもとにあるソーシャルワーカーや教師という専門職、すなわち当事

者を自立や社会参加、あるいは集団生活へと促し導くことを使命とする者は実は不向きである。その点、比較的自由な立場にあるエンパワメント型アートセラピストの実践者に利があるといえる。というよりも役割が違うというべきだろう。エンパワメント型アートセラピストは、福祉や教育などの専門職を代替するのではなく、彼らが担えない部分を多様なかたちで補っていくのである。それも、自立や社会参加へと「煽る」ことをせずにである。

翻って、この新たに得られた「エンパワメント」という視点から現代のアートシーンを見た時、アート、セラピー、エンパワメントはどのように接近し、どのような関係図を描くのであろうか。

現代のアートとエンパワメント

これまで芸術論においてアートセラピーが語られる場合、「病理」や「狂気」「無意識」と、それらが原動力となる芸術創造（たとえばアール・ブリュット）、あるいはそれらを希求する芸術（たとえば表現主義、シュールレアリスム）という二項で関連づけられる。しかしエンパワメント概念を導入することによって、広義のセラピーやエンパワメントと直接間接に関わる様々なアート活動が視界に入ってくる。現代のアートシーンを見渡すと、セラピー的・エンパワメント的效果をアーティスト自身や受容者にもたらしている活動を多く見出すことができる。たとえば九〇年代から顕著になった、自己や周囲の「私的なもの」を撮るセルフドキュメンタリー映画。その代表といえる映画監督河瀬直美は「自分がない」という空虚さを埋めるために映画を制作し、映像やカメラのもつ魔力に後押しされるという^{〔12〕}。あるいは地域の人々が主体（作り手）となるアート活動。日本では、たとえばENVISI（代表吉川由美）による「きりこプロジェクト」^{〔13〕}や釜ヶ崎を拠点に活動するNPO法人「こえとことばとこころの部屋」（通称「ココルーム」）による「代表上田假奈代」^{〔14〕}など多数挙げられる^{〔15〕}。また、すでに見てきたとおり、調査でもアート活動からアートセラピー活動へと展開する例が多く見られた。

これまで我々が棚上げしてきた問題、すなわち近代以降の制度化・専門化したアートと、セラピー、エンパワメン

トを通底するものと境界づけるものについて、今、考察する段階にきている。

本稿で有効な活動事例として取りあげるのは、先出のココロームの活動である。すでに取材や研究の対象となり、活動の一つ「釜ヶ崎芸術大学」がヨコハマトリエンナーレ2014に招聘されたりしているので知る人ぞ知る存在である。ここでは活動の背景と展開のプロセスに焦点を当てたい¹⁴⁾。

ココルームは、大阪市による「現代芸術拠点形成事業『新世界アーツパーク事業』」（二〇〇三年）¹⁵⁾に誘われ開設された。運営の手伝いに来る人は、表現には関心があるが、生き方に迷い、生きづらさを抱えているような若者が多かった。調理師免許を持つ上田はカフェを併設し、彼らを雇った。スタッフや客たちと話すうちに、就労や仕事、人間関係の悩み、生きづらさが語られる。上田は、「アート系だから問題解決にはほど遠い。でも自分をほぐしたり、人との関わりを柔らかくするトークイベントやワークショップなら企画できる」（上田、二〇一六年、五〇頁）と、「就労支援カフェ」も立ち上げる。

そしてお隣の釜ヶ崎とも関わるようになる。表現活動が彼らの生活の足しにはならないことを理解しつつ、彼らの声を聴き、表現という軸で関わりたいと思うようになる。大阪市の事業が五年で打ち切りとなったのを機に「このまちは生きる、あるいは関わるさまざまな人がひとりひとり表現する機会と場をつくる」として釜ヶ崎の商店街に移った。そこでは、日々持ち込まれる信じられないような問題やトラブルの対応にスタッフが一緒にあって走り回り、時には専門家にもつなぐ。こうした日常における関係の構築がココルームのベースとなっている点が見逃せない。

上田の活動の背景には、彼女自身の生きづらさを抱えながらの詩作や他者との協働的な表現活動がある。注目したのは、コピーライターとしての本業の傍らワークショップを継続していくなかで「生きづらさを抱える人が加わることも増え」「自分の気持ちを表す経験を重ねるうちに参加者の表情が変わっていくことに表現の可能性を感じた」（同、四四頁）という一文である。上田もアートのもつセラピー的機能を自ら発見していったのである。あるいは転職先の環境が上田に合わず苦勞していたとき見出したのが、やはり「ことばの力、声の力」だった。意思疎通の難しい同僚らに幼少時代のことや故郷のことを質問すると「……表情が緩み、声まで柔らかくなる。そんな声を聞くのが私は好きだということにきづいた」「調理師ではなく、もう一度ことばの仕事に戻りたい」「……、ここに届けられる

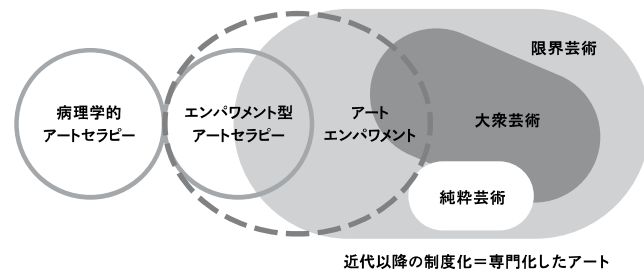
ようなことばの仕事をしたい」（同、四七頁）。そうして表現の世界に復帰した。このような現在の活動に至るプロセスは内発的かつ自律的であり、そこにエンパワメント型アートセラピストとの共通性を見出せる。

さらに次の発言は、取り組みの姿勢と内容の点で両者の共通度合を高める。「アーティストについては釜ヶ崎に招いて作品をつくってもらう（傍点「・」は引用本文）というような代弁的、あるいは搾取的なやり方ではなく、水平に関わるひとりとしてとらえる」（同、五三頁）。彼女が却下するのは、表現の専門家として招待され、表現方法を持たない人々の代わりに主張すること、あるいは他者の孤独や困難を材料にして自分の表現をすることである。さらに上田は「表現「……」は、その人が存在を認められていると心から思える場があつて初めてできる」（同、五五頁）ともいう。文字を知らないために笑われるのではないかとずっと書くことを拒み続けていた男性との出会いからこのことに気づかされ、これまで「表現」を大上段に振りかざしていたと省みる。こうして活動の背景および展開のプロセスを追っていくと、上田がこれまで我々が出会った有能なエンパワメント型アートセラピストと重なって見える。さらに、彼女はその辺のアートセラピストよりもほど腰が据わっている。ただ上田は「詩業家」を自称し、その活動を「現代の限界芸術」と位置づけている¹⁶⁾。つまり、同じエンパワメントであってもエンパワメント型アートセラピストの意識がセラピー効果の発動にあるのに対し、上田の意識が作品づくりに置かれている点に両者の違いを指摘できる。

アート、エンパワメント、セラピーの関係モデル

では、ココルームという有効な手がかりをもとに、アート、エンパワメント、セラピーの関係性を見よう。図1は以前に我々が考案した関係モデルを再検討し修正を加えたものである。アートについて非専門的な人々が日常のなかで表現するという点で、ここでは鶴見が提唱した「限界芸術Marginal Art」の考え方が有効である。限界芸術とは非専門家によって作られ、非専門家によって享受されるものであり、アートと生活が浸透し合う広大な領域を形成している。それゆえ図では周縁部が大きく取られている。それは「芸術の最初形」であり、「純粹芸術・大衆芸術を生

図1 | 日本におけるアート・セラピー・エンパワメントの位置関係



む力をもつ」とされる^④。「純粋芸術」とは専門家によって作られ、その分野に精通した専門的享受者によって享受されるもの、「大衆芸術」とは専門家と企業によって合作され非専門家Ⅱ大衆に享受（消費）されるものである。上田の活動は本人も認めるように「近代以降の制度化Ⅱ専門化したアート」の周縁部にあり、エンパワメント型アートセラピーと交差する部分を構成する。

「アートエンパワメント」はエンパワメント型アートセラピーならびに、セラピーとは呼べないがエンパワメント性が強く表出される活動領域を指す。この活動領域には、純粋芸術に向かうようなアート作品としての質を追求する活動も包摂される。ここには上田の活動はもとより先述のセルフドキュメンタリー映画やENVISIの活動などが入る。あるいは大衆芸術は享受者をエンパワーする活動や作品の宝庫といえよう。一方、アートエンパワメントから純粋芸術へと、あるいは限界芸術から純粋芸術へと直接移行する活動や作品（たとえばアウトサイダー・アート）があるため、両者の境界を接するように描いている。

エンパワメント型アートセラピストやエンパワメントに関与する個々のアート活動がどのような位置にあるのかを把握するために、我々はこの関係モデルを考案した。それぞれのアート活動がどのあたりを歩き来しているのか、このモデルに照らして検討することによって、その活動のエンパワメントとしてのあり方や立場を判断することが可能となる。もしその活動が周縁部から離れたところにある、アートとしての質を追求するものであれば、エンパワメント効果を免罪符に質に対する評価から逃れるといったことはできない。反対に、地域の活性化^{エンパワ}を期待されたアート活動であれば、アート作品としての質を免罪符にエンパワメント効果に対する評価から逃れることはできない。

また病理学的アートセラピーとアートを切り離しているのは、病理学的アートセラピーが近代医学の制度と実証主義的科学に則っており、そこでの表現は心理査定や治療を目的としてい

ること、またその病的表現にアートとしての質が認められるのは全体としては極めて少数であり、病理とアートを直結させるほどの一般性は見られないことが理由である。

以上、アートセラピー全体を五系統に分類し、「エンパワメント」概念の導入によって病理学志向のアートセラピーとエンパワメント志向のアートセラピーの峻別を図った。そしてエンパワメント型アートセラピーの上位概念として「アートエンパワメント」を設け、エンパワメント型アートセラピーとエンパワメント的アート活動・アート作品を連続的なものとして把握し、三者の関係性を明らかにした。そこに、鶴見が提唱した限界芸術論の類型を現代のアートシーンに合うように布置することで、この関係モデルがより明確なものとなった。この分類と関係モデルは、現代の多様なアートシーンを理解する上で、無用な混乱や誤った関連づけ^⑤を回避させ、エンパワメントを目的とする、あるいはエンパワメント要素を強く帯びているアート活動・作品を論じるさいの一つの指標になるだろう。

註

*1 アートセラピー（芸術療法）の原語はArt Therapy, Arts Therapy。単数形ではほぼ「絵画療法」を指すが、今日では複数の表現方法を用いるので複数形を原語としている。どの訳語を用いるかは常に議論の的となるが、本稿では現在、最も使用される頻度が高い「アートセラピー」を採用する。それにあわせ、art, artsも基本的に「アート」を用いる。

*2 慢性期とは、病状は比較的安定しているが、治癒が困難な状態が続いている時期のことである。再発予防や身体機能の維持・改善を目指しながら、長期的な看護、治療を行っていく必要がある。症状の経過時期・必要とされる処置内容に応じて、慢性期のほか急性期、回復期、終末期などに分けられる。

*3 本研究は、筆者が中心的に携わった甲南大学人間科学研究所による先行調査（二〇〇八―二〇一二年）の成果をベースに、科学研究費・挑戦的萌芽研究（463153）「アートセラピーの全国実態調査」（二〇一二年―一四年度、研究代表者・兼子一）として実施された。研究内容および成果報告については本研究のウェブサイト：<http://iknuwac.jp/ATAS/> にて公開している。

石原みどり（いしはら・みどり）

甲南大学人間科学研究所客員研究員。二〇〇八年頃よりアートセラピーを研究。

*4 全国実態調査では、最初にアンケート（二〇一二年度の活動に関する質問）を行い、続いて回答者のうち二七人にインタビュー調査を実施した。アンケート調査は、インターネットで検索できた九七三人にアンケート用紙を郵送法で配布し、回答数二四〇件（回収率二七・三パーセント）を得ている。

*5 森田ゆり『エンバワメントと人権』（解放出版社、一九八八年）、四頁。

*6 たとえば東日本大震災の後、傷ついた子ども達の心を癒したいとむやみに水彩画を描かせ、かえって傷を深めるといった事態が起こり、専門家から警鐘がならされた。朝日新聞デジタル記事『「アートセラピー」かえって心の傷深くなる場合も』（二〇一一年六月一日）<http://www.asahi.com/special/10005/KY201106090698.html>（最終アクセス二〇一六年一月三〇日）

*7 この課題については次の研究テーマとし、現在第二期として科学研究費・挑戦的萌芽研究15K13105「エンバワメント型アートセラピーの構成要件の解明と評価基準の開発」（二〇一五―一七年度研究代表者・兼子）を進めている。

*8 狭間香代子『社会福祉の援助観―ストレングス視点・社会構成主義・エンバワメント』（簡井書房、二〇一一年）、九六―一〇七頁。

*9 アンケート調査の五択の質問に対する回答の二四パーセントを占めた「その他」の自由記述。

*10 河瀬直美『につつまれて』（一九九二年）が収録されたDVD（紀伊國屋書店、二〇〇九年）所収「監督インタビュー」映像および解説リーフレット（金子裕子による公開時バンフレットより）を参照。

*11 「きりこ」は、南三陸の神社が氏子のために半紙で作る神棚飾りである。この様子をまねて、地元の人たちの宝物や思い出などを切り紙で表し各家の軒先に飾るアートプロジェクト。二〇一〇年に行われ、東日本大震災後、それを白いボードにし、被災した町民の姿や思いを表す短文とともに、流失した家の跡地に海に向かって掲げられた。嵩上げ工事に伴い、現在は町内数カ所に移設されている。また現在も、「みんなのきりこプロジェクト」としてきりこづくりのワークショップが毎夏開催されている。ENVISIとその活動については、<http://www.envisi.org>を参照。

*12 金ヶ崎（大阪市西成区）に拠点を置き、金ヶ崎の人々の生活に関わりながら、詩作や朗読などの表現ワークショップ、トークイベントなどを行っている。コールドムとその活動については、<http://www.cocoroom.org/about/index.html>、<http://cocoroom.org>を参照。

*13 それらは社会学的観点から「社会的包摂 social inclusion」の一つの有効なあり方として集積され、近年、実践的な研究が進められている。中川真「アートによる社会的包摂？」『地域に根ざしたアートと文化「大阪市」地域等における芸術活動促進事業」活動報告書』（二〇一六年三月）二九―四三頁。

*14 これに関しては、上田假奈代「金ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、コールドム」（フィルムアート社、二〇一六年）を主に参照。本書からの引用箇所は、本文中に頁番号を記す。

*15 この事業は、現在は閉鎖・解体されてしまった公設民営型立体遊園地、新世界フェスティバルゲートの空き店舗を活用し、多ジャンルのアーティストらに地域市民のための活動を十年計画で行ってもらおうというもの。

*16 「現代芸術創造事業 Art Connected Point Network アートと社会の接続点」ゆるやかなネットワークをつくる」（大阪市、コンテンツボラリー・アート事業実行委員会主宰のワークショップとシンポジウム、期間：二〇〇八年七月―十二月、於各現場および大阪市東淀川区アトースペース）のコーディネート、上田假奈代による総括、<http://www.cocoroom.org/project/acp/08.html>に掲載。

*17 鶴見の限界芸術論を現代に活かそうとする福住は、一九五〇年代と現代では社会的状況が異なり、「純粋芸術と大衆芸術がその対立図式を溶解

させながら資本芸術のものとで混然一体となっている」とする（福住廉『今日の限界芸術』（BankART1929、二〇〇八年）三八、四二頁）。資本芸術とは資本がアートのあり方を左右する姿を指す。福住の新たな図式化についてここでは検討できないが、確かに、中流層の爆発的な増大とともに制作や享受（消費）のあり方が差異化し、よりプロに近づく者がいる一方、プロは「マニア」「おたく」とも呼ばれ、またサブカルチャーが主流を占めるようになり、純粋芸術と大衆芸術の境界がもはや明確ではなくなっている。ただし理念モデルとして鶴見の分類を適用して矛盾は生じないと考えられる。

*18 たとえばアウトサイダー・アートの一担い手として障害者が挙げられるが、障害の種類や状態によって表現のプロセスや本人にとつての表現行為の意味は異なる。先天的な知的障害をもつ場合、その表現行為は治療や癒しというよりも喜びであり、いったん創作が始まると躊躇なく進めていく（ように見える）姿はまるで表現意欲の塊のようである。分類表ではそこに着目し、「表現系」としている。周囲のスタッフに病理学的アートセラピストがいる必要はなく、彼らの表現欲求を理解し、それを発露させ、欲求が満たされるよう環境を整え支援する者が求められる。